「袖ヶ浦 50 年の記録」編集に寄せて

袖ヶ浦地区学習圏会議活動の一環として「袖ヶ浦 50 年の記録」を編集する活動が具体的に動き出しました。大変喜ばしいことです。

そこで、袖ヶ浦公民館で醸成された学習圏会議活動とその一つの活動として編集された「袖ケ浦 30 年の記録集」の経過を思い起こして見ました。

この 30 年の記録は、編集委員長であった頭川潤子さんの「はじめに」もあるように

日本地図にもなかった「旧千葉街道沿いの狭い海沿いの道に海苔のひびたてが立ち並び、船溜まりには朽ち果てた船が一、二艘、埋め立て地の袖ヶ浦は赤茶けた土地と、原っぱに、せいたかあわだち草が生い茂り、風にのってほのかに潮の香りが流れていました。これが袖ヶ浦の原風景としていまも脳裏に刻まれています。東京のベットタウンとして全国の注目を集め、一万 5 千人の人がどっと移り住み、、、、、、そのまちが年を重ねて三十年。荒涼とした土地の中から人々の和が生まれ、それぞれの町に組織ができ、緑を育て、環境を守り、日々のくらしが少しづつ整ってきました。開拓地の誰もがそうしたように、いつのまにかこのまち、そでがうらもコミュニティをじっくり育んできたのです。容易なことではありませんでした。あちらこちらにぶつかりながら試行錯誤を繰り返し、知恵を出し合っての時間を積み重ねでした。たった三十年、いや、やっと三十年、それぞれの思いのなかの三十年は一つの歴史として、大きな思い出の山を築いていたのではないでしょうか。高度成長の時、オイルショック、バブル景気、ハイテク、不況、情報化（インターネット）と変貌を遂げる日本経済・社会みんな三十年の流れの中にありました。」

往時の活動の様子は、100 名以上もの執筆者のみなさんや市長、教育長、編集委員スタッフ、関係者、監修の先生方々の参集、協働による「出版記念会」の催しとして締めくくられ、この様子は翌朝の新聞記事に掲載されました。かなりの反響を呼び 1300 部の冊子も即時配布されてしまいました。もしかしたら今も図書館の棚の中にこの「記録集」を見ることができるかもしれません。

こういった諸々の活動資料は、いずれ 40 年、50 年への参考資料とすべく、「記録集 10 冊、編集の会議録、執筆寄稿者名簿、編集委員・文章の監修をいただいた委員名簿、会議活動や編集の経過を報告した「こんにちは公民館」報、そして学習圏会議活動を PR した HP 記録コンテンツ、寄稿頂いた原稿をワープロ原稿として記録したフロッピーディスクを、さらに編集に際し、多くの方々から頂いた浄財の記録、配布リスト、当該事業にかかる収支明細書」、等々を梱包し、公民館の倉庫に収納いたしました。

しかしながら、今回の編集活動に際しては、「記録梱包箱」は長年の保存や倉庫整理の中で消失しており、何か往時の記録が無いものかと照会されものとして、当時「月刊公民館」や「千葉県公民館連絡協議会」等に報告した元原稿等、資料が幸い手元に残っておりましたので、それを参考資料として提出させていただきました。当時の袖ヶ浦公民館における地区学習圏会議活動の記録としてリアリティを醸し出すものと思われます。　あれか

ら二十年が経過、世代は変わり、急速な高齢化が進み、まちの建物は老朽化してきたかもしれない。しかし、このまちに住む住人は、歴史の中で培ったコミュニティを大切にこれからのまちづくりを語っていくことでしょう。次世代へ語り継がれる民話として。

元袖ケ浦公民館長 河野清一

（平成７年～平成１１年在職）